

2022（令和4）年度 相模女子大学・相模女子大学短期大学部 発想賞

本学はスローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」を掲げ、「見つける」力としての発想力育成に取り組んでいます。この賞は、卒業研究・卒業制作等の学業の成果においてすぐれた「発想」をした学生を表彰するものです。

相模女子大学発想賞

渡邊 詩帆莉 （栄養科学研究科 博士後期課程）

Arctium lappa Lam. and Its Related Lignans Improve Hyperglycemia and Dyslipidemia in Diabetic Rodent Models: A Systematic Review and Meta-Analysis

渡邊氏は、2020年4月に栄養科学研究科 博士前期課程に入学し、研究テーマ「ゴボウの抽出物あるいはその関連のポリフェノールの投与の糖尿病動物への影響の検討」を自ら設定し、研究活動を開始した。「ゴボウ(*Arctium lappa* L.)抽出物とその関連リグナン投与が糖尿病性高血糖に及ぼす効果の検討：メタアナリシス」の題目にて学位論文を執筆し、2022年3月に「修士」の学位を本学から授与された。次いで、2022年4月に同研究を継続する目的で博士後期課程に進学した。研究成果は、2022年11月に“*Arctium lappa* Lam. and Its Related Lignans Improve Hyperglycemia and Dyslipidemia in Diabetic Rodent Models: A Systematic Review and Meta-Analysis” の題目（ゴボウ（*Arctium lappa* Lam.）抽出物とその関連リグナン投与が糖尿病モデル動物の高血糖および脂質異常症を改善する：システマティックレビューとメタアナリシス）で筆頭著者として英文誌 *Nutraceuticals* の Special Issue に Feature Paperとして掲載発表された。この論文は、ゴボウの抽出物あるいはその関連のリグナンの投与が糖尿病動物の上昇した血糖、中性脂肪、総コレステロール値を対照群と比較して有意に低下させることを明らかにしている。また、第22回 国際栄養学会議でも同研究成果は報告された。

山邊 志都子 （栄養科学研究科 博士前期課程）

L-カルニチンの補給が2型糖尿病患者の糖代謝に与える影響に関する検討；メタアナリシス

山邊氏は、2020年4月に栄養科学研究科 博士前期課程に入学し、新型コロナウイルス感染症の蔓延という厳しい研究環境の中で研究テーマ「L-カルニチンの糖尿病患者の代謝に及ぼす影響の検討」を自分で設定し、研究を行なった。L-カルニチンは、脂肪酸代謝において、長鎖脂肪酸をミトコンドリア内に取り込む際に重要な役割を果たす生体内物質として知られている。2型糖尿病患者においては、L-カルニチンの血中濃度が低下し、脂質代謝に障害をきたす可能性などが指摘されてきた。本研究では、3,000以上の英語の論文を網羅的に収集、抽出されたデータを系統的に統計解析した。その結果、L-カルニチンを2型糖尿病患者に投与すると、血糖値は非投与群に比べて有意に低下するが、糖化ヘモグロビン値は改善しないことを明らかにした点で、学問的意義がある。

早崎 ゆかり（社会起業研究科）

しなやかな社会人になるための「こころを紡ぐ」プログラム

計画された事業は、若者の離職・休職を防ぐために、企業が期待する「主体性」、「粘り強さ」、「コミュニケーション力」を大学生に身に付けさせるための、教育プログラムの提供である。奄美大島の自然と文化に触れる体験と、その経験の内省や仲間との情報共有を通して、新しい行動の促進を図るプログラムである。さらに継続的なコミュニティ、就職相談セッション、地域課題解決プロジェクトの場の提供も予定している。

この事業計画は、社会起業研究科のディプロマ・ポリシーの5つの要素である「社会性、経営理論の応用、問題の構造分析、事業の戦略性、人的ネットワークの活用」の各視点から高く評価される、優れた発想に基づく計画である。

稲吉 結羽（日本語日本文学科）

清少納言の書道観に関する一考察—『枕草子』を中心として—

稲吉氏の論文は、日本書道史において劃期となる平安時代の書道史に着目し、当時の書道観を『枕草子』を中心に丹念に検証したものである。すなわち、『枕草子』の本文から書に関する記述を丹念に抽出し、用具、用材、筆跡等の観点から分析することによって、清少納言、ひいては平安時代の書道観について検討している。当該期の書道史において重要な視座を提供するものであり、かつ卒業論文としての水準も高い。

村田 洋絵（英語文化コミュニケーション学科）

地域教育と人づくりがもたらす地域活性化の可能性について

村田さんは、個人の成長と地域活性化の関係に関心を持ち、島根県海士町という隠岐諸島の離島のリゾートホテルにインターンとして合計6ヶ月以上長期滞在しながら、時間を見つけては、町内の教育関係の催しの参与観察を行い、島留学に来ている高校生や移住者、町の人々に丁寧なインタビューを行い、「地域教育と人づくりが、いかに地域の活性化につながるか」について、システム思考を用いて分析を行った。

地域活性化と個人の関係では、地域に関わることがどのように個人の成長に結びついたか、という視点の研究は数多くあるが、村田さんの研究は、産業人材育成ではなく、暮らしの中で育まれる個人の成長も含めた、広義の「地域でのひとづくり」が、どのように地域活性化に結びつくかという発想からの分析であり、その点において、新規性が高いと考えられる。

三原 珠希（子ども教育学科）

自閉症を持つ子どもの就学先決定における公的支援と家族受容に関する研究

本論文は、障害者の権利条約批准のために政府が進めてきた体制整備（差別解消法などの法的整備を含む）の中で、教育の世界では最も大きい制度変更として「就学先決定」に関する研究である。制度変更前に就学先を決めた当事者によるインタビューに加えて、現行の制度についても様々に調査している。就学相談は、制度変更により充実していることを明らかにしただけではなく、制度に関わらない課題を指摘した。政令改正以前の調査などはみあたらないため、独自に研究したという点でも価値の高いものである。研究内容の一部を、指導教員が東京都就学支援委員会で紹介し、新しいガイドブックの活用では、保護者が就学先決定に参考するだけでなく、そ

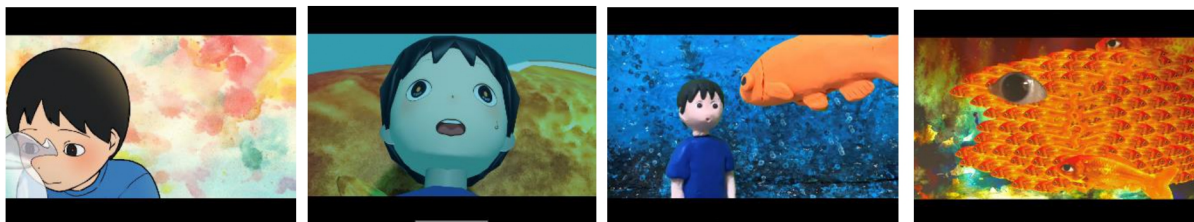
れに携わる教職員、就学前の保育・教育、就学後の教員にも普及が必要であることが了解された。

玉川 珠美 （メディア情報学科）

複数の手法を取り入れたアニメーション制作『パクパク要求金魚』

絵コンテから制作、撮影、編集と試行錯誤を繰り返し挑戦したアニメーション作品である。

主人公である少年の細かなニュアンスを表現する2DCG、ダイナミックなカメラワークが使える3DCG、画面の動きに迫力のあるシーンを表現するためのクレイ、金魚の不気味さを表現するためのコラージュとそれぞれのシーンの世界観に合った4つの手法を使用した。



これらはメディア情報学科で学んだ知識、体験から得た学びを基に意欲的な作品として鑑賞者を不思議な世界に誘い込む魅力のある作品となった。

仲尾 茉希 （生活デザイン学科）

器（うつわ）

卒業制作に当たり、ウールに着目した仲尾さんは素材研究のために牧場に足を運び、自ら羊の毛を刈るところから始めた。その体験から普段何気なく使用している素材について見つめ直し、その背景にある自然の営みや命そのもの、また自然の一部である自分と他者、人と人との関係について深く考察し発想を広げた。

その発想を高い精度で具現化するために、素材と対峙してその可能性を探求した。試行の末、刈り取った羊の毛を紡いで糸にし、二重織・綴織などを併用した立体的な布を織ることで自身のテーマを表現することを見出した。毛刈り、洗毛、カーディング、糸紡ぎ、そして織機にかけて製織。布を織るためには多くの工程を経る必要がある。

山室 萌音 （社会マネジメント学科）

水族館における動物福祉と来館者の動物観

世界では、イルカの飼育やショーを廃止する水族館が増えてきているが、日本では、その数はとても少ない。本卒業研究は、その背景として、日本人の多くが、1) 水族館に、種の保存、教育、調査研究ではなく、レクリエーションとしての役割を求めていること、2) 動物福祉に関する知識・理解が十分でないこと、3) 外国人とは異なる動物観を持っていること、等があることを、Tweet分析、アンケート調査、資料分析により具体的に明らかにしている。分析結果をふまえた政策提言も導出しており、社会的意義が大きい優れた研究である。

小林 美羽 （人間心理学科）

<助け合い>をめぐる文化人類学的研究

小林美羽さんの卒業研究は、社会福祉課程に在籍しつつ文化人類学ゼミを選択し、<ケア>についての文化人類学的な考察を試みているものである。本研究は、制度やシステムを介する

＜ケア＞と、個別的・単独的で相互的・互酬的なケアとを区別し、前者の社会福祉学の扱う制度的なケアの実践の重要性を十分に認識したものである。そのうえで、後者の人とひととの相互的なかわりを含むケアを＜助け合い＞と呼んで、制度やシステムにおける役割関係をはみ出した、単独的で相互的な関係としての＜助け合い＞に着目した文化人類学的な研究となっている。

本研究では3つの事例を取り上げている。一つ目は、浮ヶ谷幸代氏による「べてるの家」の事例で、筆者である小林さんは、浮ヶ谷氏の研究から、具体的なケアにおいて互酬性が生まれること、その関係が制度的な役割関係を超えていることに注目している。二つ目の事例は、小林さん自身が2020年度より3年間参加してきた、本学のサンプラプロジェクトの事例である。サンプラプロジェクトは、さまざまな事情から施設や病院でクリスマスを過ごす子どもたちへ本を贈るもので、本学の対外的なイメージ向上にも寄与している。小林さんはさがみはらのボランティアの中心メンバーのひとりとして活躍しており、とくに2020年度はサンプラプロジェクトの活動自体が休止する可能性もあったが、仲間と「こういうときだからこそ行きたい」という声をあげて、各所と連携をとりながら、感染症対策を工夫して実施にこぎつけている。その自身の活動を卒業研究と結びつけて、匿名の贈り物でありながら、それが具体的な子供たちのイメージと結びつくことで、そこに一般性を超えた単独性が生まれていることを示している点は、特筆すべきである。3つ目の事例は、小林さん自身が、2022年度夏に相模女子大学「ヒトを対象とする研究」に関する倫理審査委員会規程による審査を受けて行なった、神奈川県綾瀬市で地域づくりを試みるI氏をたずねて氏の活動についての聞き取り調査による事例である。I氏の活動は、制度的な社協の福祉活動とは別に、カフェなどを用いた地域のつながりをつくるもので、そこでも制度的・システムのケアと区別された、互酬的・単独的な関係による＜助け合い＞がみられることを明らかにしている。

以上のように、本研究は、様相の異なる3つの事例において、互酬性と単独性が結び付いた＜助け合い＞としてのケアを見出している点と、それが制度的なケアを補っていることを説得的に示したものである点で、大変優れた研究になっている。

藤下 津音（健康栄養学科）

清涼飲料水に含まれる果糖ブドウ糖液糖の生体影響に関する研究

清涼飲料水の表示で目にする機会の多い果糖ブドウ糖液糖に焦点を当て、市販品における使用状況や生体影響に及ぼす影響について、ショ糖やその他の甘味料と比較することで、果糖ブドウ糖液糖の現状と課題を明らかにすることを目的とした研究を行った。

身近にある食品の過剰摂取がどのような生体影響を引き起こすかを明らかにした上で、甘味料との組み合わせ摂取や啓発活動にも言及しており、科学的な安全性だけでなく、一般消費者の行動を考慮した考察がなされている点が評価に値する。

須賀 優衣、吉田くるみ（管理栄養学科）

エスプーマを用いた嚥下調整食デザートの開発

高齢化の進展に伴い、嚥下機能の低下した高齢者が増えている。嚥下機能の低下があっても「好きなものを食べたい」という要望を実現できるよう、見た目や味とともに香りも楽しめる嚥下調整食デザートを開発した。カンナで削ったような氷で雪のようにふわふわした口どけで

ある「雪花氷」と増粘剤を組み合わせ、さらに口だけの良さや見た目の楽しさが特徴のエスプーマを加えることで、溶け出しても誤嚥しにくくなり、それを物性や溶解後の粘度を測定して確認している。

参考：吉田くるみがエスプーマを担当し、須賀優衣がかき氷を担当した。

相模女子大学短期大学部発想賞

石原 花凜 （食物栄養学科）

健康でおいしく食べるための市販カップ麺の塩分濃度と嗜好調査

本研究は、日本人の高血圧の原因が食塩の摂りすぎであることを踏まえ、市販のカップ麺に着目した。そこで、食塩の摂りすぎを抑えながらスープまで美味しく食べるにはどうしたらよいかを考え、付属のスープを半分量だけ入れる方法で塩分濃度、嗜好調査を行った。その結果、スープを半分量にしても塩分濃度が1%程度もあることがわかり、実際に短大生25名に試食してもらった感想においても、「おいしい」と回答した者が21名（84%）で「物足りない」と回答した者は1人もいなかった。そのため、カップ麺の付属スープを半分の量に減らしてもおいしく食べることができ、かつ減塩つながることを提唱できる意義のある研究である。

以上